寺尾 真樹さんは青木 理恵さんと一緒にいます。

10月3日 21:53

.

【青木山荘での時間】

先日、コーチ仲間の 青木 理恵さんのお宅で、

人生の大先輩お二人とお話しする機会に恵まれました。

映画・小説を通して、女性や社会のあり方を問い続けてこられた

松井久子さんと、

グローバルな自由人としての生き方を、そのまま体現してこられた

辰野ゆかりさん。

お二人に共通するのは、

女性が一人の社会人として何かをなし、認められることが

まだまだ難しかった時代に、

見えない壁をしなやかに越えて、

新しい道を切り開いてこられたこと。

そして、70歳をゆうに過ぎてから素敵なパートナーと巡り会い、

互いが互いのままでいられる関係を築きながら、

共に人生を楽しんでいらっしゃること。

さらに、お料理上手なこと。

・

4時間、ノンストップ。

タクシーの予約をずらしても話は尽きない、

濃い時間でした。

この時間が私に残してくれたものは

『こういう方々がいてくださったからこそ、私たちの今がある』

という実感と感謝。

そして、

『これからの年月をどう生きるかという一つの指針』

でした。

・

……と、ここで終わると、「で？」だと思うので、

以下、少しだけ（と言っても長いです💦）、

伺ったお話のほんの一部を、書いておきたいと思います。

・・・

■ 壁の前で、別の道を探す ― 久子さん

久子さんの最初の映画(1998年公開『ユキエ』)は、50歳になってから、アメリカで、英語のセリフでつくられています。なぜだったのかと伺うと、当時の日本の映画界は圧倒的な男性社会で、プロデューサーとしてお金を出しても、女性の自分の言うことは誰もまともに聞いてくれなかった。「だから、アメリカへ」とのお答えでした。留学中の息子さんに1年大学を休学してもらい、通訳についてもらっての仕事だったそうです。

日本で無理なら、アメリカへ！

この発想に、まず圧倒されました。壁の前で諦めるのではなく、別の道を見つけて進んでしまう。それも、海を越えるスケールで。

5本の映画では、国際結婚、認知症、非婚シングルマザー、フェミニズム、憲法を。その後は小説に場を移して、老い、性、パートナーシップなどを。社会が見て見ぬふりをしがちなテーマを、時代に先駆けて正面から取り上げ続けていらっしゃいます。脱稿したばかりという4作目の小説最新作も、伺えば「そうきたか」というテーマでした。

思ったら形にする。久子さんのその姿を前に、見て見ぬふりをしているのは私自身ではないか、と立ち止まりました。

・

■ 縮んだバネは、跳ぶ ― ゆかりさん

ゆかりさんは「初めて話したかも」とおっしゃりながら、家柄と時代とからの制約の多い子どもの頃からのお話をしてくださいました。久子さんと口を揃えて、「貴重な記録だから、ぜひ書いてほしい」と言ってしまいました。

結婚後は、夫さんから「子育ては全部お前に任せる」と言われます。

すごいのはここから。

周囲のエリートたちからあれこれ言われても惑わされず、枠にはめることなく、自分がいいと思うやり方で、伸び伸びと、グローバルに、3人のお子さんを育ててこられました。高校生の娘さんをいきなりスイスの国際会議に放り込んでしまった逸話は、最近出版された娘さんの本(『15歳からの世界のとびらの開き方』辰野まどかさん著)にも載っています。

「子育てをしている頃は、自分のやりたいことはずっと我慢していた」と言うゆかりさん。我慢が長く続くと、人は自分の思いそのものを見失いがちです。けれどゆかりさんは、縮んだバネのように、その間ずっと力を貯めていたのでしょう。お子さんたちが大きくなってくると、かつての留学生やピアノの先生に留守を託して、ご自身がポンと海外へ「留学」してしまう。いよいよ本領発揮です。(その後もたびたび海外に出て行かれるゆかりさんの様子は、ゆかりさんの著書『アンジェリーナと過ごした夏』で垣間見られます)

久子さんと同じく、ゆかりさんにも「ふつうは……」という枠がないのだと感じました。あるのは、どうすればやりたいことをやれるか、という工夫だけ。その真っ直ぐさと大きなスケールが、お子さんたちをはじめ沢山のものを実らせてきたのだと思いました。

・

■ 男と女、人と人

正直、お二人にお会いするまで、私はとてもドキドキしていました。せっかくの時間を楽しいものにできるだろうか、と心配で。

でも、すぐにそれは杞憂だとわかりました。そこにいらしたのは、緊張していた私を温かく迎えてくださる、懐の深い、話すほどに味わい深い人生の先輩たち。女性性、男性性というものを尊びながら、人として人を大事にする。その当たり前を、そのまま体現している方々でした。

久子さんは、一緒に暮らすようになっても、夫さんのこれまでのルーティンを「変えないようにしている」と言い、ゆかりさんは「一つ約束した二人のルールは、互いが互いのやりたいことを応援すること」だと言います。

どちらかが与え続けるだけでも、求め続けるだけでもなく、互いに与え、受け取り、それぞれの「どうしたいか」を大事にし合う。自分で自分を満たせる"大人"どうしだからこそ築ける関係なのだと、納得しました。

そのためには、スキンシップも大事なコミュニケーション。触れ合うと出るオキシトシンは安心のホルモン、という話になった時、久子さんは夫さんとのことを、「私たちは二人とも、出会った頃はもっとシワシワだったのに、今は肌にもハリが出て綺麗になっている」と話されました。また夫さんは、ある取材でお二人の関係を聞かれて「全存在的安心」と答えたそうです。その言葉、思わずゆかりさんと二人でメモしました。

ところが残念なことに、日本では、スキンシップの捉え方も、相手への伝え方も、どうもうまくいっていない。偏見や誤解も多い。そこが変わっていけば、人生後半の夫婦の関係も、いえ、そもそものパートナーシップ自体も、もっと変わるのに。

変えていきたいよね。そんな話で盛り上がりました。

・

■ 流れの中の足場

久子さんが「憲法ができた年に生まれ、その後、日本は戦争をしてこず、右肩上がりの成長の時代を“希望”というものを持って生きてこられた。生きてきた時代がまるまるそんな時代だったのは誠に幸せだったけれど……」と今の時代を案じると、ゆかりさんが「それを作ったのも自分たちなのだから、何かしなくては、とパートナーと話している」と応じる。すると「あなたのパートナーにお会いしたいわ」と久子さん。

そのやり取りを聞きながら、同じ「戦後」でも、私が生きてきたのは、その色がどんどん薄まっていく時代だったと思いました。薄まり切った先は、また「戦前」なのではないか。そして自分には、この流れを変える力なんてないのではないか……。そんな不安と悔しさを抱えていたこの頃でしたが、流れ落ちていく水の中で、ふっと足場を見つけたような気がしました。同じ思いを持つ人が、ここにいる。

せっかく足場が見つかったのだから、あとは踏ん張って、流れの中でもしっかりと立って歩きたいと思いました。

・・・

理恵さん、久子さん、ゆかりさん、

本当にありがとうございました。

この続きを、ぜひまた。

＊松井久子さんの情報はこちら

https://note.com/hisakomatsui/all

https://www.essen.co.jp/